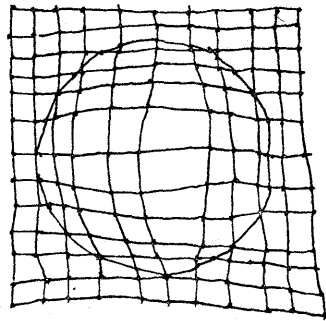


# 一九八三年の年頭に

——下降する時代の保育を考える——

津 守 真



先日、朝日新聞に紹介された、「すまないが、英国は君たちを必要としない」というサンデー・タイムズ紙掲載の記事に、私は強い衝撃を受けた。(昭和57年9月9日付)その記事の上部には、人が列をつくって歩いてゆく姿のイラストが描かれている。誕生

——競争——試験——職業訓練——と説明のタイトル

が次第に進んでいって、最後は断崖から落ちて下水溝の暗闇に前のめりに消えてゆく。これは若年失業問題の特集ということであるが、生れてから成長と共に経てゆくこのタイトルをひとつひとつ見ていって、最後

には暗い世界に吸いこまれて消えてゆくところに目をとめると、若い人の存在、成長の価値そのものが否定されるような気持ちに陥ってしまう。かならずしも英国人がこう考えているというのではなくて、欧州の経済状態の現実を示す記事なのだろう。しかし、この記事は、青年に希望を与えることのできない現代の世界の暗さを象徴しているように思う。日本の経済、社会状態は、世界の諸国に比べると良い方だといわれるが、私共の身辺でも、社会の多くの組織体が下降と縮少の方向にあることは否めない。幼児保育界もその例外で

はない。

年頭から景気の良い話であるが、世界中が不景気と動乱の最中なので、致し方ない。一九八三年は、暗く厳しい世界情勢の中にはじまる。

過去三十年間——それは私の同時代の人々が生きてきた歴史に属するが——日本の社会は高度成長をつづけてきた。幼稚園、保育園もまた高度成長をつづけた。そしてこの数年来、幼児数の減少も伴って、幼児保育界は新たな時期を迎えつつある。高度成長期には当然と思ってきた考え方や倫理が、いまや変更を迫られている。拡大することが良いことだという考え方はいまや通用しなくなり、それを望んでも不可能である。むしろ、以前とは逆に、小さいことの価値をあらためて認識することが必要になってきている。保育施設についても同様だと思ふ。

保育は、もともと、小規模の園でなされる仕事である。園長先生は全部の子どもを知っていて、親たちとゆっくりと相談にのることができ、職員たちもたのしんで保育のあれこれ話し会える、そのくらいの規模

ではじめてなしえられるのが保育の仕事である。規模を拡張することが仕事の成功を示すという考えは、本来、保育の世界では通用しないことなのである。高度成長期は、大きな幼稚園を数多く生んだ。いまや、この時代に、大きな幼稚園はいままで規模を維持しようとして、敢て小さくなってほしい。現実に私共の周囲で、経営が成り立たなくなっているのは、落着いてあたりまえの日常の保育をしている小さな園である。小規模の園が増すことによって、日本の保育は、本当に子どものためのものとなるだろう。

高度成長期の拡大の思想とそのため勤勉の倫理の裏には、しばしば無限に増大する欲望の追求がある。勤勉の徳は、個人生活でも社会生活においても、生活の向上に役立ってきたし、今後も重要な徳でありつづけるであろう。しかしそれが無限に増大する人間の欲に奉仕しはじめるとき、どこかで美徳が悪徳に変わる。そして本来美徳であったものが、人間らしさを喪失させる源にもなる。現代の青年は、すでに壮年期を経過した私共よりもそのことを知っているように思える。研究者を志しているある青年は、貧しい生活をす

るのに必要な最低額を計算して、それ以上は敢てアルバイトをしないように注意していると語ってくれた。落着いた学びの時間を犠牲にしてアルバイトを拡大させたならば、精神生活の低下になることを若者は知っている。保育施設の経営においても、いままでとは違った発想と倫理があるのではないだろうか。子どもも職員も、人間らしい交わりと落着きを中心にすえて、毎日をたのしめるようにしたい。

周囲の社会、経済状況がいかに緊迫し、厳しいものになろうとも、そのことは、毎日の保育者の子どもとの応答の仕方を変えはしないし、子どもの生活がそのために変わるものではない。保育の営みは、どんな周囲の情勢の中でも、子どもとおとなとの間にたゆまずにつづけられてゆくものである。保育者にとっての課題は、子どもが今日を充実して過すのにはどうしたらよいかを日日工夫することである。それはたのしみながらなされることであるけれども、子どもにとっても保育者にとっても、一日は、新たな世界を開く冒険である。決して常識にだけ従ってなされるものではない

し、きめられたカリキュラムやプログラムを遂行することによってなされるものでもない。保育者あるいは教育者の生き甲斐は、日常の生活の中に、子どもと共に敢て小さな冒険を試みるころにあると思う。教師の職は、現代においては最も安定した職業になったために、子どもの生活も、きめられた枠の中で無難に過せばよいという気風を生んでしまった。その陰には、子ども自身の発想も、成長するエネルギーも生かされずに、納得のゆかない生活を強いられて悩んでいる子どもたちが数多くいる。このことは幼児のみでなく、小中学校、高校、障害児教育いずれにも共通のことである。教師の待遇の改善は重要であるけれども、教師の本領は、安定とは逆の冒険にあると思う。たえず、真の教育とは何かを問いつづけつつ歩みたい。

保育の現場の実践は、周囲の社会情勢の変化とは関係なく日日つづけられてゆくが、暗く厳しい社会の課題は、実践する保育者、また経営者、管理者のもうひとつの肩の上に、重くのしかかっている。不況の時代、下降する社会、崩壊の危機に立つ組織の中にあっ

て、子どもを保育する人間らしく生きつづけ、幸いにも生きのびることができたなら、それこそが次の上昇期への基盤となるのではないだろうか。いささか極端な場合を念頭において考えすぎているかもしれないが、二十世紀末の幼児保育関係者は、程度の差こそあれ、似たような立場に立たされるのではなからうか。この時期にこそ、保育が本当に子どものものであるとして地についたものとなりうるのだと思う。もしもこの時期に、高度成長期と同様に、表面的な拡大を追い求めるならば、時代錯誤となるのみならず、人間を破壊するものとなりかねない。下降する社会の中に生きること、をむしる誇りとし、この時こそ真に人間となることのできる時代と考えたい。

十九世紀の世紀末に記されたリルケの日記の中に、「私に与えられた人生を優しく愛し」「そして心の奥深く、わたくしに属するものすべての可能性を成熟させ」と云っているところがある。(リルケ 森有正訳「フィレンツェだより」筑摩書房 P 96) 下降する時期

には、重苦しい悩みが多いが、それを受身になって悩むのでなく、そこに与えられた自分の人生に優しい眼を向けるとき、受動の悩みは能動の喜びに変えられる。そして心の奥深くにある己れの可能性を成熟させることができるとき、人間は物質的には貧しくとも、精神的には上昇する存在となるだろう。

戦後の日本は、「文化国家」の建設を目指して立ち上った。私の青年時代である。その後三十年、日本は目覚ましい復興をしたかのように思われたが、真の文化をつくり上げるのは、実はこの下降する時代を待ってはじめてなしえられる仕事のようなのだ。そして、文化としての真の保育が形成されうるとするならば、それはこれからの下降の時代である。子どもが生き甲斐をもって充実した生活をできる保育の小さな現場がひとつでも増すならば、暗い社会はそれだけ明るさを増すのだと思う。